

## 世界各国で助成が活かされています

過去50年間に日本万国博覧会記念基金の助成を活用して建設された海外の施設についてご紹介します。

### <第2回>

## タンザニア連合共和国／ザンジバル武道館



日本の柔道をアフリカに広げるため、ザンジバル柔道連盟からの申請で2001年度に500万円の助成を行いました。以下、同連盟名誉会長の島岡強氏より、現在の施設の状況をご報告いただきました。

青空道場での10年を経て、天候の影響を受けない屋根付き道場での柔道発展を目指して2002年4月に建設したザンジバル武道館は、ザンジバル柔道連盟のもとで約20年にわたって、柔道をメインとした武道全般の活動や文化ホールとして活用されています。



ザンジバル武道館正面



万博記念基金助成のプレート

青空道場時代は、練習も試合も天候に大きく左右されていましたが、建設後は、天候に関わらず練習ができるようになり、国際基準を満たす試合場が2面取

れる広さになったので、国内大会だけでなく、国際大会も開くことができるようになりました。

選手たちの力量も上がり、アフリカ大会や世界柔道選手権大会に出場するなど国際大会でも活躍できる選手も出てきました。このような選手の活躍が国内で認められ、柔道がザンジバルの国技の1つに認定されました(国技は、サッカー、陸上、柔道です。タンザニアは、タンガニーカ本土とザンジバルとで成り立つ連合共和国で、ザンジバルには政府があり国旗や国歌もあります)。



第13回東アフリカ柔道大会(2021年3月)

ザンジバル武道館へは、いろいろな国の人が柔道をしに来たり、見学に来たりしています。2014年7月には秋篠宮ご夫妻がご訪問くださり、ザンジバルの柔道家たちによる投げの形と記念試合をご覧いただき、その折には日本の柔道が遠い国で根付いていることをお喜びくださいました。

また、ザンジバル武道館は、柔道だけではなく、空手、合気道にも使用され、武道全般の拠点にもなっています。特に合気道は、日本から師範が来てセミナーを開催するなど盛んです。



ヤングスターズ子ども柔道大会開会式(2021年11月)

ザンジバル武道館にはステージがあるので、音楽コンサートや、幼稚園、学校などの式典や観劇会、結婚式なども時々開かれており、室内ホールが少ないザンジバルで文化の拠点としても貴重な役割をはたしています。

このように、ザンジバル武道館は、柔道場、武道全般、そして文化ホールとしてザンジバルに根付いた建物になっています。完成以来20年になりますが、当連盟で適宜メンテナンスをして今もきれいに保たれており、これからもみんなで大切にしていきます。

## ● 助成先の事業紹介

2020年度および2021年度の助成事業の中より、事業者から寄せられた報告をご紹介します。

### ▶2020年度◀

## 第8回アジア・パシフィック少数多体系物理に関する国際会議

事業者：第8回アジア・パシフィック少数多体系物理に関する国際会議組織委員会

交付確定額：435,000円

実施期間：2021年3月1日～5日

実施場所：金沢市文化ホール(石川県)およびオンライン

少数粒子からなる極小世界の物理学に関する国際会議を、金沢市とオンラインのハイブリッドにより開催しました。コロナ禍のタイミングでしたが、会議日程の変更とハイブリッド方式の決定を迅速にすすめ、準備を念入りに行い、滞りなく活発な会議を開催することができました。オンライン参加を受け入れたことで、当初見込みを大幅に上回る26か国295名(うち国外136名)の参加者が得られ、特にアジア地域から多くの参加があり、若手研究者の発表や議論を通して、研究の刺激や意識の向上を図ることができました。ハイブリッド開催のため音響・通信機材の準備が重要でしたが、助成金を会場設営にあてることができ、会議の成功につながりました。また、旅費や滞在費の補助が不要となったことで会議登録料を無料とすることができ、多くの参加者を集めました。国際諮問委員会からの会議への評価も芳しく、次回ベトナム開催へうまく引き継ぐことができました。



実施風景



授賞式(若手研究者の表彰)

### ▶2021年度◀

## 新作能「長崎の聖母」 「ヤコブの井戸」

事業者：公益社団法人 鑲てっせんかい仙会

交付確定額：2,000,000円

実施期間：2021年8月4日～8日

実施場所：杉並区立杉並芸術会館「座・高円寺」1(東京都)

日本とオーストリア両国で約3年かけて共同制作し、2019年9月にウィーン、パリ、ワルシャワで世界初演した新作能『ヤコブの井戸』(作:ディートハルト・レオポルド)の日本初演と「原爆をテーマにした能を」という長崎市民の求めに応じて創作され、海外でも上演を重ねている『長崎の聖母』(作:多田富雄)の二本立て公演を行うと共に、インターネットライブ配信を実施しました。コロナ禍の影響により客席数を半分に制限しましたが、連日ほぼ満員の盛況で、入場者延べ721人、インターネットライブ配信で128人が観覧しました。

客席数を半減させたため大きな減収となりましたが、万博記念基金などの各種助成金によって各方面の経費が賄え、また、意図する表現を金銭的な理由で制限されることが少なくなり、質の高い公演を維持することができました。



『ヤコブの井戸』(撮影:吉越研)



『長崎の聖母』(撮影:宮内勝)



## 2021年度奨学金給付事業

日本万国博覧会記念基金では、2021年度より「日本の伝統文化を研究する外国人留学生(大学院修士課程)を対象にした奨学金給付事業」を行っています。事業開始より1年が経ち、初年度奨学生のうち2名の奨学生が修士課程を修了しますので、その研究発表を掲載します。

日本万国博覧会  
記念基金



京都市立芸術大学大学院美術研究科  
工芸専攻(陶磁器)2回生  
鄭天雨(テイテンウ)(中国)

### 「神性」への思いとしての美を探究

中国・浙江省杭州で生まれた私は、2018年に中国美術学院の陶磁器専攻を卒業後、留学生として渡日した。今は京都市立芸術大学陶磁器専攻の大学院2年生である。

中国は焼き物大国だが、なぜ日本へ陶磁器を学びにきたかという、日本の美意識や自然観に惹かれたからだ。日本に来たばかりのとき、黒川雅之の『八つの日本の美意識』という本を読んで、すごく影響を受けた。あれから、いつもそういう意識を持ちつつ、周りを見たり、感じたりしている。そして、日本には、八百万の神々という言葉があり、それは自然のもの全てに神様が宿っているという考え方である。自然を拝み共に生きて、全てのものに感謝の気持ちを持つことは大切だと思う。そういう観念は自分の作品にも語らせている。また、前衛陶芸の走泥社や現在活躍している日本の陶芸家の方々に憧れているので、ぜひ中国で陶芸を学んでから日本に留学しようと決めていた。

神様が暮らす世界は天上であったり、高い山の上であったり、私たちの世界から遠く離れた場所とされることが多いが、人類の祖先は、石や岩は精霊や神の主な宿り場所であり、この世界に出入りをする「門」だと考えていた。いわゆる岩石崇拜である。その考え方は私の潜在意識にもありそうだ。自然物に対して、人類の祖先と同じような感覚を持っているのは不思議だと思う。それは人類が共有する生命記憶だろう。

自然、命、人間からインスピレーションを得て、東洋的美意識に基づき、そういうスピリットが宿るような神秘的で静寂な世界を表現することで、原始的な宗教感覚を感じさせ、人々の生命記憶を喚起しようと思う。

神様が宿りそうな石、光の舞台などを作ったり、「寄生」や「共生」の関係をモチーフにして、宿主への影



「秘境」2020 陶土・鉄粉



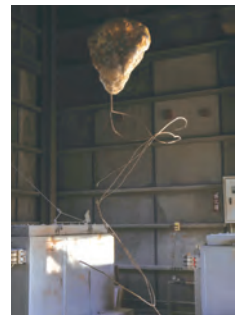
「ひかりに会う」2021 陶土・釉薬・金属

### 奨学生選考の経緯

- 2021年3月 公募を開始
- 5月 大学での学内選考を経て、4大学から5名の申請を受付
- 6月 外部審査委員による審査
- 7月 5名の外国人留学生へ奨学金の給付を決定

響、または一体化している「親密」な関係を意識しつつ、土、釉薬、金属などの異なる素材の関係性の中で制作してみたりした。

2020年に、音楽の演奏場を作るため、山でみんなと穴を掘った。雑草取りのとき、遠くの地下まで伸びていて、一人の力で抜こうとしても全然動かない5mの蔓に苦戦した。本当に力強い自然物で、「大地の母から離れたくないのかなあ」と思いつつ、その蔓とそこにある土でへその緒と子宮の関係を表現した。その表面に、そこにある植物で作られた草木灰の釉薬を掛けて『母胎』と名づけた。

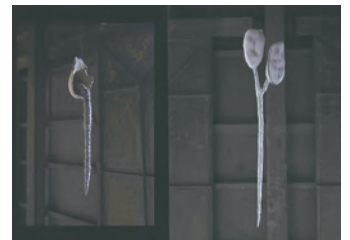


「母胎」2020 山の土・山の草木灰・葛の蔓

『母胎』を制作することで、人間は「植物性」を持っていることに気づいた。

我々は、夜の睡眠においては植物のごとく意志に支配されずに宇宙のリズムを体感している。また、我々は植物のごとく光を感じる。ただ、今の私たちは人工的な光を手に入れたことで、植物性が退化してきた。

もともと人間の在り方は、流転している昼夜、四季に生を委ねる植物に似ているのではあるまいか。植物のような美しい人間に対して、憧れを抱きながら、「植物」と「人間」の間という仮想の生命形態を具象化する試みをした。「木」と「人」の結合として『杵』というタイトルをつけた。



「杵」2020 陶土・童仙房・シャモット・釉薬・金属

人々が私の作品を見て、自然と自分が繋がる感覚を取り戻すことで、命というもの、そして自分自身をよりよく理解できれば幸いだと思う。

作品の奥行きを深めていくために、これからも自分の内面を発掘して、「神性」というものへの理解を深めつつ、「神性」への思いとしての美を感じさせる作品を制作したい。また、新しい技法や材料の研究を行い、作品と空間の関係性や作品のあり方なども探究し続けたいと思う。

将来は自分のスタジオを作り、作品を作り続け、自分の世界観と焼き物の魅力を見せたいと思う。日本で学んだ技術や知識を中国で学んだものと融合させ、活用させ、自分なりの作品を生み出そうと思う。オリエンタルな、文化的な、伝統的な美意識を持ちつつ、今まで感得した人間、自然、宇宙のリズムについての世界観を表現したい。そして、

陶磁器を作ることだけではなく、画家や科学者など、他の分野の方々とコラボレーションして、自分の幅を広げれば良いと考えている。

日本万国博覧会記念基金のお陰で、日本各地の美術館を見学したり、様々な展示に参加したり、陶芸の森で2か月滞在制作したりすることができた。私にとっては、全てこれから必ず活かせる経験だと思う。



無題 2021 陶土・シャモット・釉薬



東京藝術大学大学院映像研究科  
メディア映像専攻2回生  
Joyce Lam  
(ジョイス・ラム) (カナダ)

### 「家族」というシステムを考える

いつの間にか、日本にいる時間が幼少期に家族で移住したカナダと、大学時代を過ごしたイギリスよりも長くなりました。植民地時代の香港に生まれて、さまざまな土地を転々としてきた自分のアイデンティティは常に不安定なものだと感じますが、自分の所属する場所(home)を探っていくなかで、社会を構成する最小単位の「家族」が一番身近にある異物の存在だと気づきました。一方で、多くの国では法的に定める「家族」の関係性は結婚でしか獲得できません。社会学で「家は近代の発明だ」と論じられるように、私たちが持っている理想の家族像は各国の法律をはじめ、地域的・文化的制約などによって作り上げられ、制限されています。

修了制作の「家族に関する考察のトリロジー」は、家系図を用いてさまざまな「家族の定義」を考察するプロジェクトです。その実践を通して、複雑な家族関係を図式化し、対象化していきます。2月に行われた修了制作展で上演した45分のレクチャーパフォーマンスは、家族研究をはじめ、文化人類学、日本の観光の歴史など、さまざまな分野と視点を横断したりサーチから「月」「木」「火」のモチーフを抽出して三部作として構成しています。日本語、英語、広東語、中国語で上演／上映しますが、言語が混沌としている台本を読み上げる身体を通して、不確実なアイデンティティを表現しています。



「家族に関する考察のトリロジー」上演の様子

私の実際の家族写真を使用し、家系図の書き方の説明からレクチャーパフォーマンスの「第一部：月編」が始まります。選択できる「夫婦」の単位で始まる家族が「親子」の関係より優先されるNASA(アメリカ航空宇宙局)の「家族の定義」によると、結婚していない自分には「直系家族」がいません。しかし、

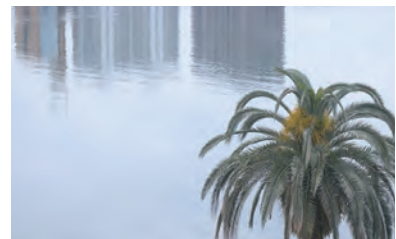
宇宙や月では国籍、人種、性別といった、人間を区別するカテゴリーは無関係なはず。月にいる「日本の外国人」というナンセンスに疑問を投げかけます。



家系図の書き方の説明に使用したスライド「第一部：月編」より

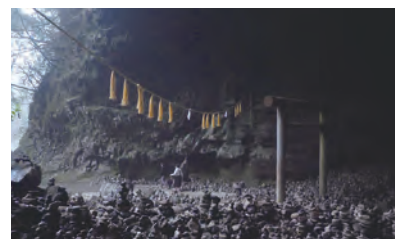
続いて、シングルチャンネルの映像作品として上映する「第二部：木編」は、宮崎県の高千穂が舞台となっている日本神話に登場する神々の系図(family tree)を取り上げます。また、一般人と結婚した結果、降嫁した皇室女子にとっての「幸せ」を通して、「結婚＝幸せ」という固定概念について思索します。「不要不急」の旅に出る私の旅行記録と高千穂神社の宮司へのインタビュー、皇室の結婚と新婚旅行についての報道で構成したメタドキュメンタリー(フィクションの要素も織り交ぜられたドキュメンタリー)です。

最後の「第三部：火編」では、家族とともに暮らす家(ヤ)という建築空間の中で、男女の活動空間とそれぞれ担っている役割を考えます。家(イヘ)の「へ」は「ヘツツイ」を指し、つまり家の中心には「火」があると柳田國男が論じているように、共食から獲得する家族関係の可能性を提示します。



宮崎市内で植えられているフェニックス  
「第二部：木編」より

修了制作に取り組んだこの一年間、日本万国博覧会記念基金の奨学生として採用していただいたおかげで集中してリサーチしたり文献を読んだり、全力で制作に打ち込むことができました。映像だけではなく新しい作品形態にチャレンジし、これまで勤めていた編集者としてのスキルも活かせることは大きな収穫でした。



天照大神の岩戸隠れの神話に登場した天岩戸  
「第二部：木編」より

また、TOKAS-Emerging 2022という公募プログラムに入选し、修了後の4月2日(土)～5月8日(日)に、トーキョーアーツアンドスペース(TOKAS)本郷にて初めての個展を開くことになりました。この展示では、修了制作でまとめたものを映像インスタレーションとして再構成し、そしてレクチャーパフォーマンスの台本をまとめた小冊子も制作したいと考えています。このように、今後も人生においてさまざまなことを自由に選択できるように、「家族」の研究を深めながら制作を続けたいと考えています。